
俺はテレビが嫌いだ

夢野ユーマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺はテレビが嫌いだ

【Nコード】

N87660

【作者名】

夢野ユーマ

【あらすじ】

ある文学少年の怒りと哀しみと成長。

俺はテレビが嫌いだ。

俺は本が好きだ。

マンガやライトノベルより、活字ばかりの本が好きだ。正字（旧字なんて言い方は許さない）も好きだ。今は翻訳された本を読んでいるがゆくゆくは外国語も沢山勉強したい。

今は高校二年で田舎でくすぶっている。

親父も母ちゃんも姉ちゃんも弟も、文学は好きじゃないみたいだ。じいちゃんとかばあちゃんも。

みんな、仕事していない時はテレビばかり見ている。

テレビに出てくる人間はみんな、流行の服装や髪型をして誰が誰やら分からない。男か女かも分からない時がある。

またドラマなども実に馬鹿馬鹿しい時がある。一度、じいちゃんとばあちゃんと「水戸黄門」を見て、二人がすごく感心していたので、「この話は『リア王』のパクリだよ！」と抗議したが、通じなかった。しかも、ラストがハッピーエンドに改ざんしてあった。「『リア王』はあくまでも悲劇で終わって、その主題を再生させるため、シェイクスピアは『テンペスト』っていう最高傑作を書いて」と説明したが、全然通じなかった。「また慎吾が訳の分からないこと言ってる」と相手にされなかった。

家族の居間には姉と弟が学校の行事やスポーツでもらった賞状やト

ロフィー、盾などがたくさん飾ってある。写真もたくさんある。

俺のは何もない・・・

腹が立つのは読書感想文のコンクールの金賞を姉も弟もとっていることだ。俺は毎年「ハドリアヌス帝の回想」「緑の家」「讃歌」「風景と実感」といった重厚な作品の感想を旺盛に書いているが、担任に黙殺されている。

もっと言うと、感想に飽き足らず、歌とか小説を最近、書いている。

不思議に思うだろうが、どうして俺がこの家族の中で読書するようになったかと言うと、俺が小さい頃、たまに遊びに来る若いオバちゃんがいる、「ラプンツェル」とか「大江山」とか、ちょっと通な話を聞かせてくれた。

でも、その人は急にふつとりと来なくなった。一度、母ちゃんに聞いてみたが、「その人のこと、絶対、父ちゃんとじいちゃん、ばあちゃんの前で言わないでよ」と釘をさされた。

悲しくて、泣くために物置に行ったら、夏目漱石、森鷗外、芥川龍之介、太宰治、三島由紀夫などの文庫本を見つけた。それを読むことにした。根拠は分からないが、文学を好きでい続ければ、その人とのつながりがなくならない気がした。ただ片想いは十年ぐらい続いている。

その人には会えないままだ。

最近はルイ・フェルディナン・セリヌとか寺山修司とかアントニア・スーザン・バイアット、マヌエル・プイグ、塚本邦雄、斎藤史などいろいろ読んでいる。

そんな俺に大事件が起こった。

ある朝、テレビのニュース番組を見ていたら、顔だちの整った若い男が記者会見をしていた。

隣に初老の男がいる。

「今回、夢幻書房文学賞が桐原快斗さんに贈られることが決定しました。賞金は二千万円です」

若い男はハキハキと話した。

「賞金はNPO法人に寄付して、文学の普及に役立ててもらいます」
何かうさんくさ。

「見なさい、慎吾。桐原快斗は映画やドラマを何本も主演しながら、小説まで書いたのよ」

「才能のある人は何でも出来るんだねえ」

「慎吾の訳の分からない作品とは大違いね」

「ふざけるなよ！こんなの絵に描いたようなヤラセじゃねえか」

俺は怒りを爆発させて、家を出ていった。しかし、学校も桐原快斗の話題で持ちきりになっていた。

「あっ、負け犬慎吾が来た！」

「痛々しい」

「うるせーな！」

「分かっただろ！何百冊も本を読んでも、お前みたいな奴は作家になれねーんだよ！！」

「時代遅れの慎吾。酒と涙と男と女と慎吾」

「うるせー！！」

一時間目は女の若い国語の先生がやって来た。

「桐原快斗のニュース聞いた？慎吾、どう思う？」

「別にどうもこうもねえよ！一つだけ言えるのは、お前みたいなブスがいくら騒いでも桐原快斗みたいな大スターには相手にされないってことだよ！！」

サイテー、と声上がる。帰れコールが起こる。

「かーえっれっ！かーえっれっ！」

俺は怒って教室を出て行った。

「キモいオタクがねたんでるだけ」

誰かが言って、皆がドツと笑う。

俺は学校の裏山に行った。ちょこんと小さい岩に腰かける。

何か哀しみがこみ上げてくる。

俺は文学が好きで、一途に文学に打ち込んできた。その文学に裏切られた。

思わず涙があふれてきて、こぼれた。

くそう。俺がいろいろ努力しても、タレントにかなわないのか。俺がいろいろ学んできたことは無駄なのか。

俺は文学を友達にして、人間の友達はいない。家族にもうざがられている。どうしたらいいんだ。皆に合わせようと俺なりに努力しているけど、上手くない。

俺は声を上げて泣いた。さみしい。つらい。一人ぼっちだ。

しかし、そんな心の底からフツフツと怒りに似た感情が湧いてきた。

慎吾。謎の存在が心の奥底から語りかけてくる。太宰もセリヌもカミュも、みんなお前と同じ不正や怒りや孤独に耐えてきたんだよ。それがお前の好きな本物の文学なんだよ。

俺は涙を拭いて立ち上がった。

秋の空はどこまでも蒼かった。

俺は本も出せないかも知れないし、賞も取れないかも知れない。

でも俺は俺の文学をやめない。

そう思って歩き出した俺の足どりは力強かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8766o/>

俺はテレビが嫌いだ

2011年10月7日15時21分発行